

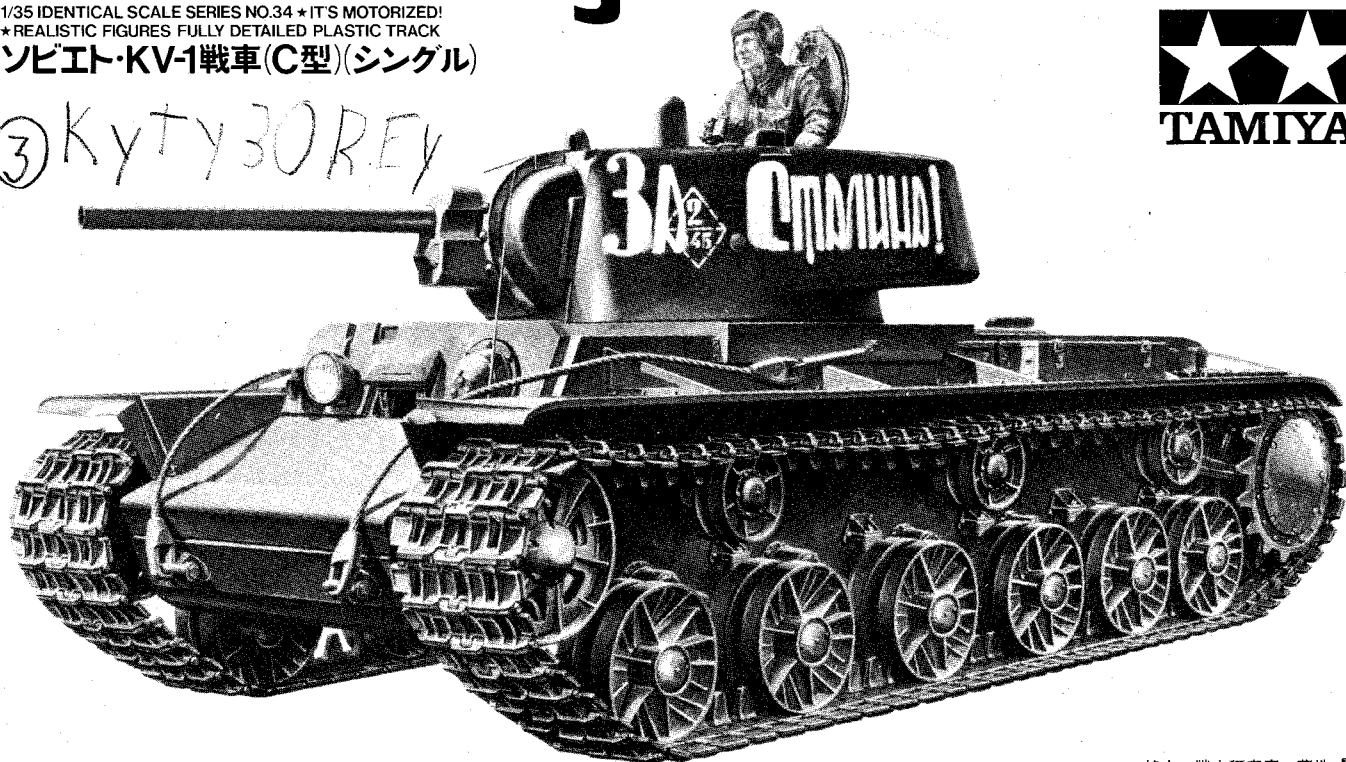
Russian Heavy Tank KV-1 TYPE C

1/35 IDENTICAL SCALE SERIES NO.34 ★IT'S MOTORIZED!
★REALISTIC FIGURES FULLY DETAILED PLASTIC TRACK

ソビエト・KV-1戦車(C型)(シングル)



③ KYTYBOREY



協力：戦史研究家・菊地 晟

これからの物語はドイツ軍第6戦車師団と1台のKV重戦車の実際に起った戦闘の記録である。

1941年6月23日、第6戦車師団は予定どおりトリアニアのロッセイニエ町を占領し、さらにその北東を流れる河の2つの橋も、敵の抵抗を排除して確保した。戦闘も終了、捕虜を後送するため1台のトラックが橋頭堡よりロッセイニエ町に向った。彼等は途中で路上に1台の戦車がいるのを発見した。KV-1重戦車であった。橋頭堡に引返したトラックは唯一の道路が戦車によって塞がれていることを指揮官に報告した。
ロッセイニエにある師団司令部との電話線は早くも敵の戦車兵のために切断されて不通となっていた。師団は2つに分断された形になった。敵戦車は発見以来まる1日動かなかった。

翌6月24日早朝、師団本部は12台の補給物資を積んだトラックを橋頭堡に送った。だが、KV戦車は、このトラック縦隊を掃射し、12台のトラックは全部破壊され炎上した。本部はやっとこの怪物に気づいて偵察斥候を送った。しかし、その情報からではソ連軍の攻撃が切迫していると思われる徴候は何一つなかった。1台のKV戦車を除いては。

KV戦車に対するドイツ軍の反撃はまず橋頭堡側から始められた。選ばれたのが50ミリ対戦車砲中隊であった。

対戦車砲中隊は敵戦車に行動をさとられないよう遮蔽物を利用して、戦車から約1000メートルの地点に進出し、更にカムフラージュをばどこして敵戦車の前方約600メートルまで接近した。

中隊は直ちに発砲を開始した。1発、2発、3発……全弾命中であった。この光景を丘の

上で見ていた師団司令部の将兵たちは歓喜した。だが、それも8発目までだった。KV戦車は静かに砲塔を動かし、76.2ミリ砲を対戦車砲中隊の方向にむけて止めた。3発の発射音が響く。対戦車砲中隊は、あっという間に2門がやられた。その他の兵士も死傷し、砲の破片とともに横たわった。破壊された砲の回収は夜に入るまでできなかった。ドイツ軍の初戦は完敗であった。

対戦車砲中隊の失敗を聞のあたりに見た師団司令部は、その日の午後、88ミリ高射砲の徹甲弾に期待をかけて、第2次の攻撃をかけた。ロッセイニエにあった高射砲陣地から88ミリ高射砲 (Flak36型) が1門引き出され、注意深く敵戦車に向って移動を開始した。道路上に散乱した昨日のトラックの残骸をたてにし、枝葉でカムフラージュした砲は更に進んで森林の端にでた。そして砲座を設置しようとした瞬間、それまで砲を下げて静止していたKV戦車の砲塔が、突如旋回した。76.2ミリ砲が火を吹く。88ミリ高射砲はこの一撃で近くの溝の中に吹飛ばされた。二度と使えなくなった。その上、戦車からの機関銃掃射のためドイツ軍は死体さえ収容できなかった。又もやドイツ軍の完敗であった。KV戦車の乗員は高射砲の移動をそ知らぬふりでドイツ軍のなすま、にさせ、最後の瞬間にその裏をかく一撃で相手を倒したのである。まことに冷静で勇敢な行動といわなければならない。

6月25日。ドイツ軍は3号、4号戦車をオトリに使う、戦車部隊と88ミリ高射砲との共同作戦をとった。オトリの戦車部隊は林縁に展開して三方から砲撃を開始した。

この攻撃を受けたKV戦車は砲塔を振り回し、林縁のドイツ戦車に反撃をはじめた。一方、ロッセイニエから再び引出された88ミリ高射

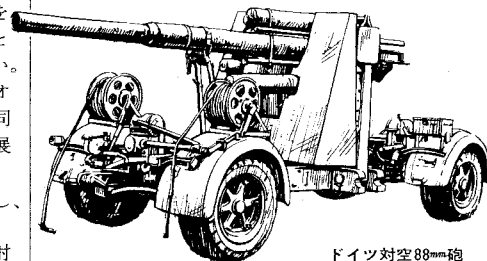
砲はKV戦車の後方に移動して、絶好の射撃地点に座をすえて好機をうかがった。

88ミリ砲の金属音がこだまする。初弾命中！だが、何ということだ！KV戦車の砲塔が後方に旋回しはじめたではないか。一撃では至命傷にならないのだ。

つづいて88ミリ砲の金属音がひびく。一発。二発。さしものKV戦車も遂に死命を制せられたのだった。

更に4発の88ミリ砲弾が射込まれた。しかし、この頑強な戦車は最後まで炎上しなかった。

ドイツ軍兵士たちは苦勞して射止めた獲物を一目見ようと戦車に近ずき、射撃の効果を確認した。発射された7発の88ミリ砲弾はわずか2発が装甲を貫通していた。ドイツ兵たちは新らためてこの戦車の強靱さに驚かざるを得なかった。一人の兵が戦車にのぼり、砲塔のハッチを開けようとした。開かない。その時、突然砲塔が回りだした。ドイツ兵たちは驚いて四散する。戦車兵は生きていたのだ！砲塔下の命中弾の穴に手榴弾がまとめて投げ込まれる。爆発音。ハッチが吹飛んだ。ソ連戦車兵は戦車と運命を共にしたのである。



ドイツ対空88mm砲

PARTS

部品が欠けていないかたしかめましょう。

A 部品

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. キャタピラ | 2. ワイヤロープ |
| 3. タンクカバー | 4. 防弾板 A |
| 5. リヤパネル | 6. 砲塔 A |
| 7. 防弾板 B | 8. タンク A |
| 9. タンク B | 10. 防弾板 C右 |
| 11. 防弾板 C左 | 12. ツールボックス |
| 13. ドライバースパネル | |
| 14. エアーディフレクター板 | 15. 砲塔 B |
| 16. 砲塔 C | |

B 部品

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1. アイドラホイール | 2. スプロケットホイールA |
| 3. スプロケットホイール B | |
| 4. コマンダースハッチレバー | |
| 5. コマンダースハッチヒンジ B | |
| 6. コマンダースハッチヒンジ A | |
| 7. コマンダースハッチアーム | |
| 8. コマンダースハッチ | 9. フロントハッチ |
| 10. ドライバースハッチヒンジ B | |
| 11. ドライバースハッチアーム | |
| 12. ドライバースハッチヒンジ A | |
| 13. ドライバースハッチ | 14. 銃銃身 B |
| 15. 銃架 C | 16. 銃架 B |
| 17. 銃架 A | 18. 銃身 A |
| 19. ロードホイール A | 20. ロードホイール B |
| 21. フロントホイール A | 22. フロントホイール B |
| 23. アイドラホイールピン | |
| 24. エキゾーストパイプ 左 | |
| 25. エキゾーストパイプ 右 | |
| 26. ぶろおとしアーム | 27. フックホルダー |
| 28. フック | 29. ガンシールドドラム |
| 30. ワイヤロープフック | 31. ガンシールド |
| 32. ライト B | |
| 34. 警笛 | 35. 砲身 |
| 36. 砲身先 | 37. リモコンアダプター |
| 38. ドライバースシート | 39. コマンダースシート |

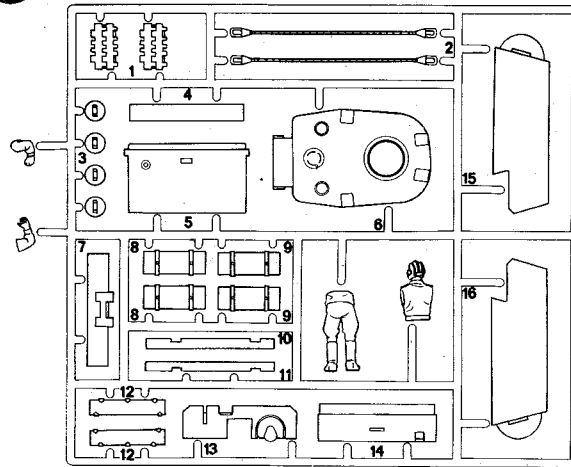
C 部品

- | | |
|------------|-------|
| 1. ホイル止め部品 | 2. 不用 |
|------------|-------|

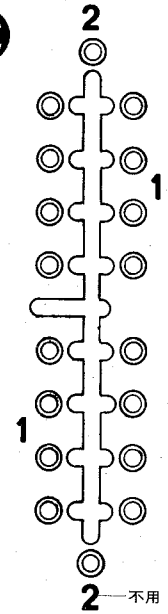
M 部品

- | |
|--------------|
| 1. ヒニオンギヤー |
| 2. ギヤーボックス |
| 3. モーターブラケット |
| 4. 3φ×6ビス 1コ |
| 5. 3φ×4ビス 2コ |
| 6. 逆転スイッチ板 |
| 7. 電池受金具 |
| 8. シャフト |
| 9. レンズ |

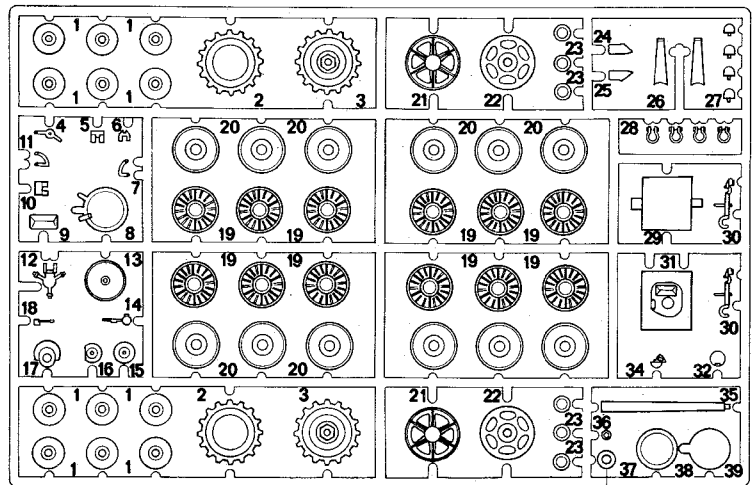
A



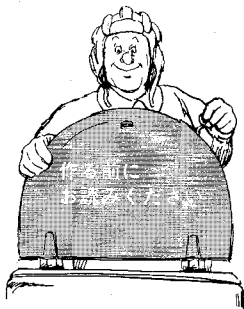
C



B



不用



★キットを組立てる前に必ず説明文を読んで下さい。

★ナイフ、ドライバー、ニッパー、ヤスリ、等を用意しましょう。

★このキットにはRE-26モーター1個と単2乾電池2本が必要です。

★部品をランナー〔枝〕から切りはなす場合には手でもぎとらないでニッパーやナイフ等でいねいに切り取って下さい。

★接着剤はあまり多くつけずに少しづつ両面につけましょう。



これは塗装色指示のマークです。



《塗装上の注意》

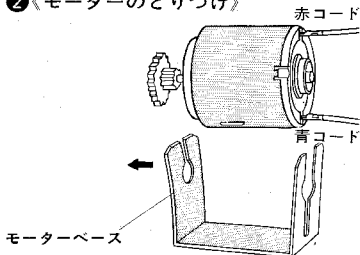
★戦車の塗装は完全にキットを組み上げてから行ないます。

★塗装説明はP 6 に説明してあります。

★塗装には、バクトラタミヤカラーが便利です。各部分の色はバクトラタミヤカラーで指定してあります。

バクトラタミヤ

② 《モーターのとりつけ》

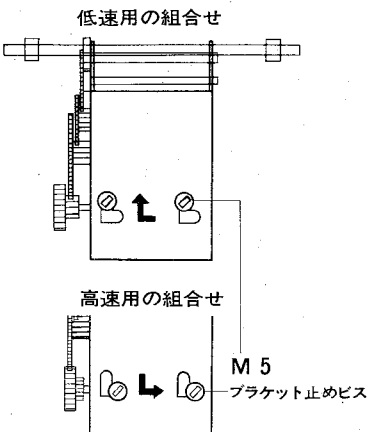


③ 《ギヤボックスへのモーター取付け》 (2段变速の方法)

ブラケットは取り付け方によって、低速と高速の2種類にチェンジすることができます。

低速は下図の様に矢印の方向にブラケットを固定します。急坂や馬力アップに適し、力強く走行させることが出来ます。

ギヤボックスギヤとピニオンギヤとの噛み合わせの調節はブラケット止めビスをゆるめ移動させて行ないます。



＝スムーズな走行を楽しむために＝
★可動部分に油をさすのが一番良い方法です。

★ギヤボックスには機械油又はグリスなどをさしましょう。

★ホイールなどプラスチックの可動部分にはプラスチックを侵しにくい植物性油【天ぷら油など】をさしましょう。

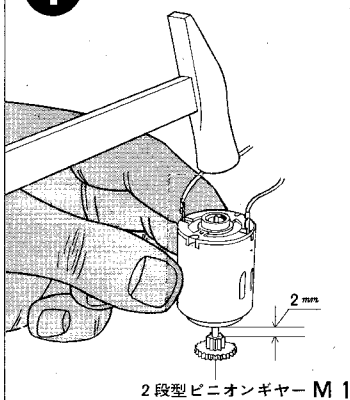
家庭用品品質表示法による接着剤品質表示
取扱上の注意

1. 幼児の手の届かないところに保存し、いたずらをしない様注意して下さい。
2. 火気に注意し換気をよくして下さい。
3. 故意に吸わない様注意して下さい。

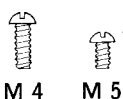
表示者

S Z. 3000 S Z. 3006 S Z. 5013

① ギヤの打ちこみ



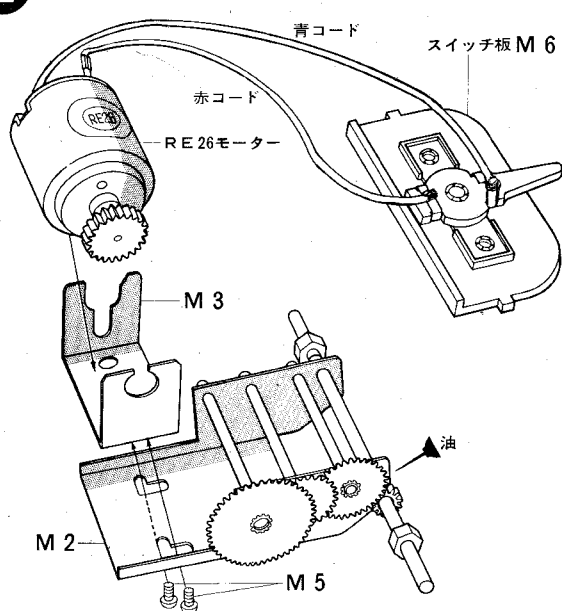
《ビスの種類》



使用モーターは

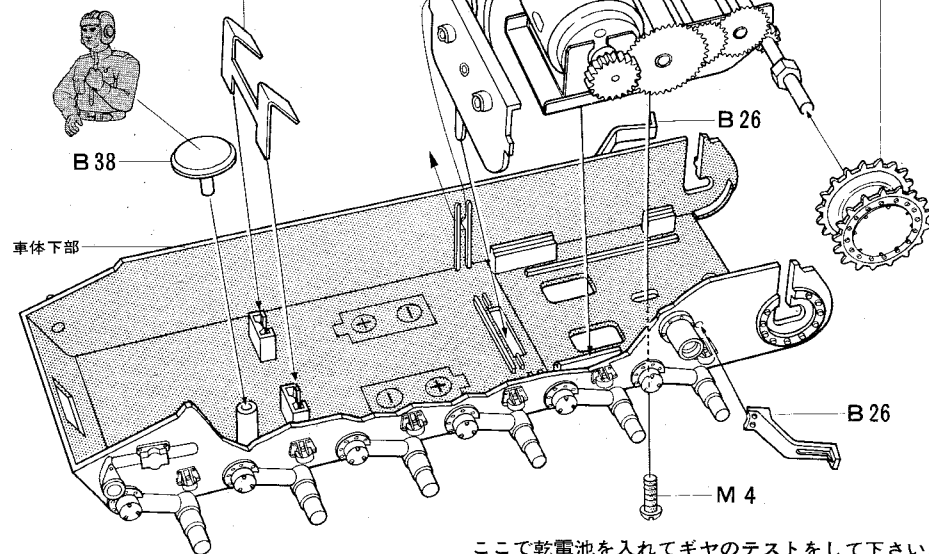


② ギヤボックスのくみたとスイッチの配線

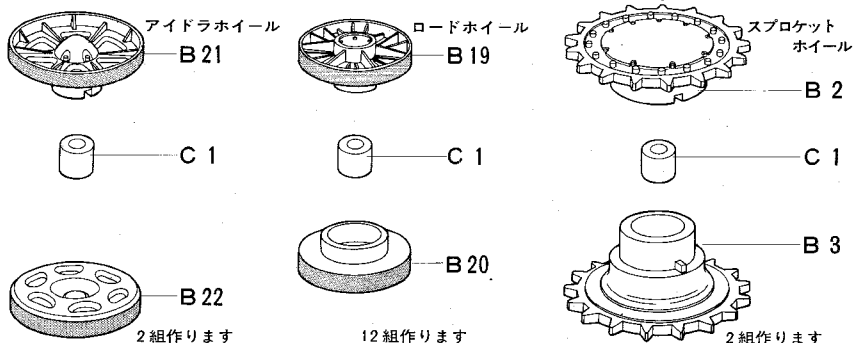


③ ギヤボックスのとりつけ

人形は車体と砲塔のどちらかにつけて下さい

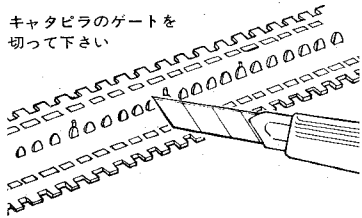


④ ホイルのくみたと



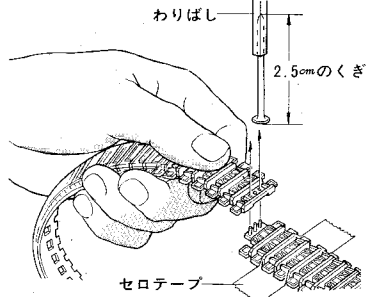
《キャタピラのくみため》

キャタピラのゲートを
切って下さい

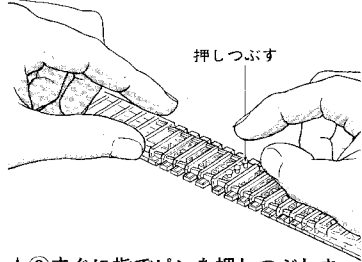


《キャタピラの上手な焼き止め方法》

★下図のようにわりばしに2.5cm位の
くぎを差し込んだものや、先のごく細
いドライバーを使って焼き止めます。



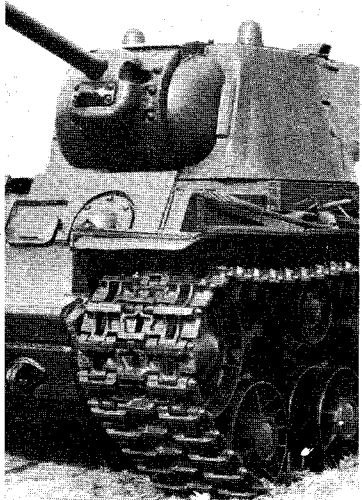
★①キャタピラ的一方をセロテープで
机の上に固定し、ピンを穴にはめこみ
ます。次にローソク等で熱したくぎの
頭やドライバーの先でピンの頭を軽く
熱します。



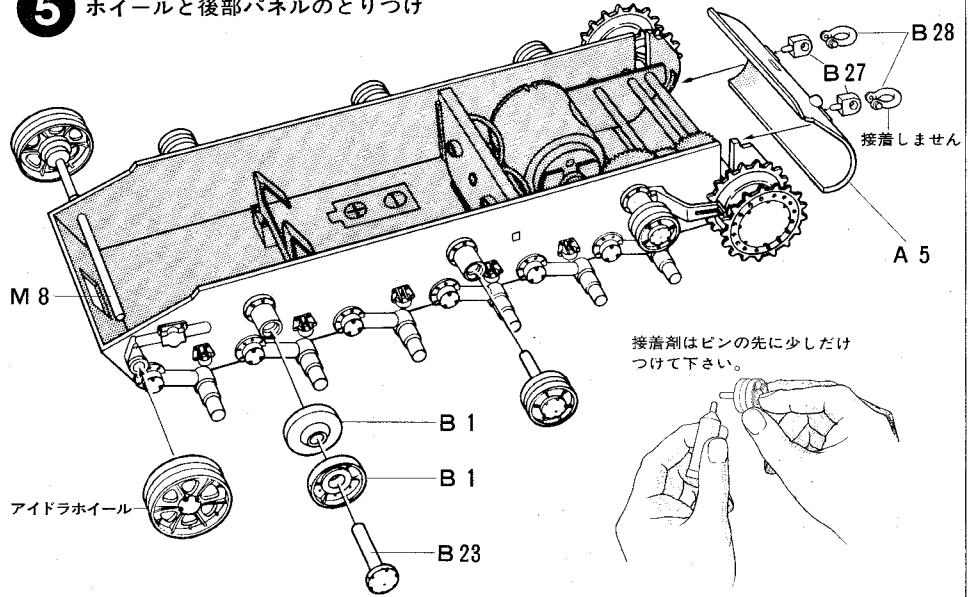
★②すぐに指でピンを押しつぶしキャ
タピラを連結させます。

★キャタピラが切れたり焼き止めが弱か
った場合には図の様に、
黒糸かホッチキスで補強
して下さい。

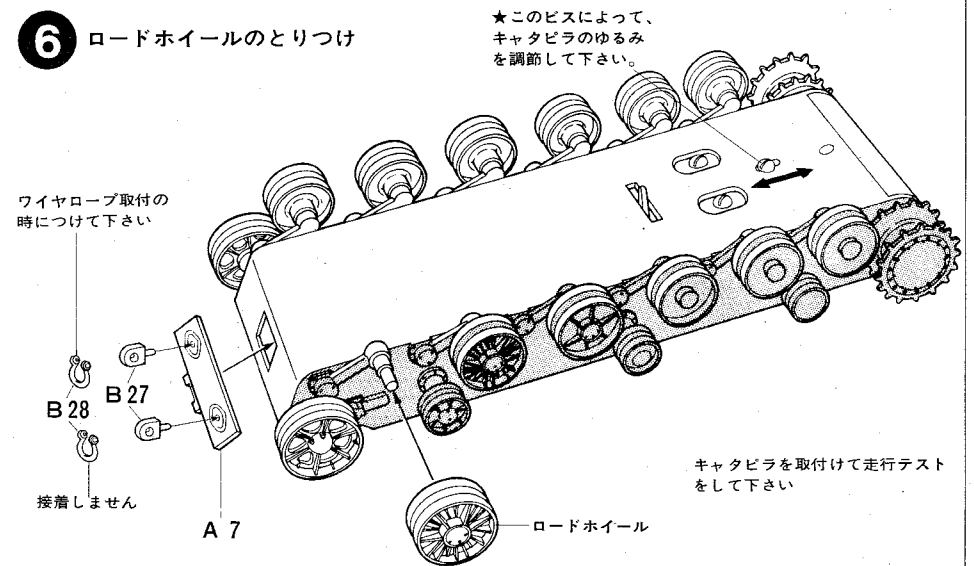
★キャタピラの方は写真は参考にし
て下さい。



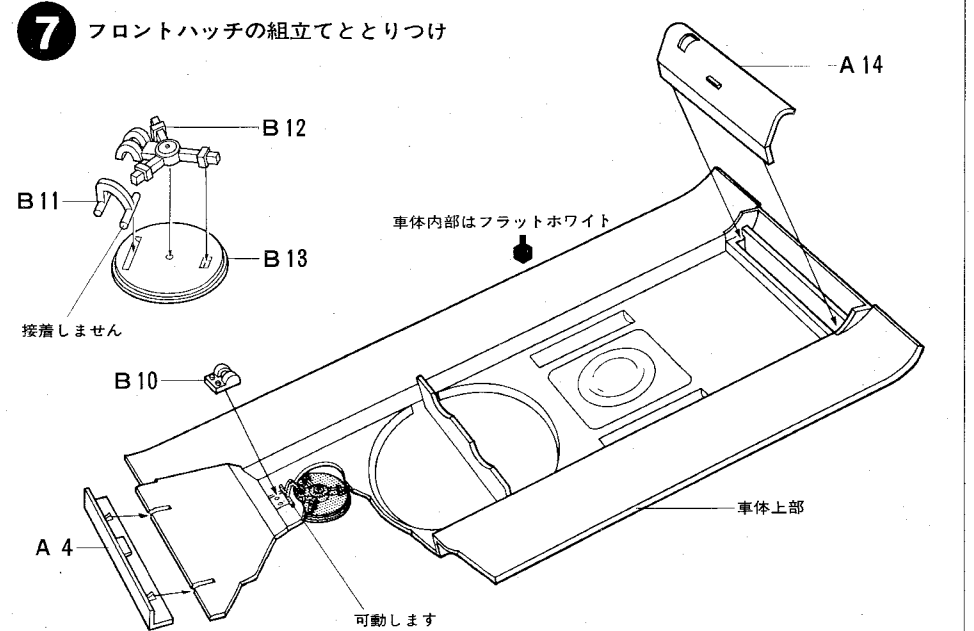
5 ホイールと後部パネルのとりつけ

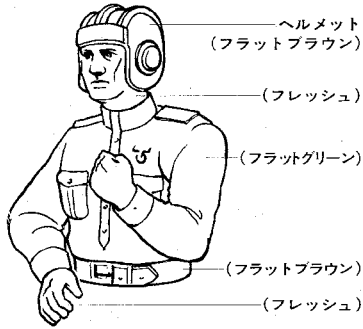


6 ロードホイールのとりつけ

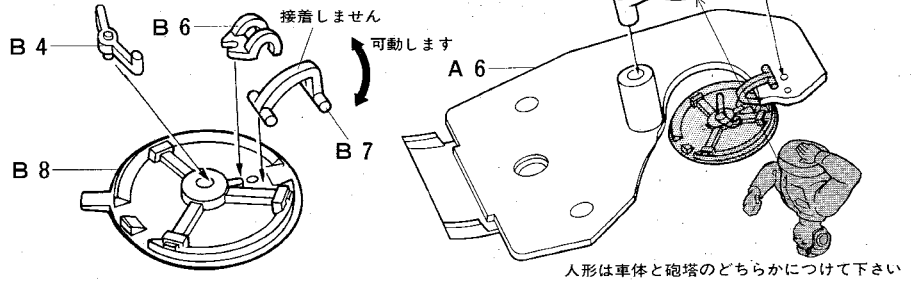


7 フロントハッチの組立てととりつけ

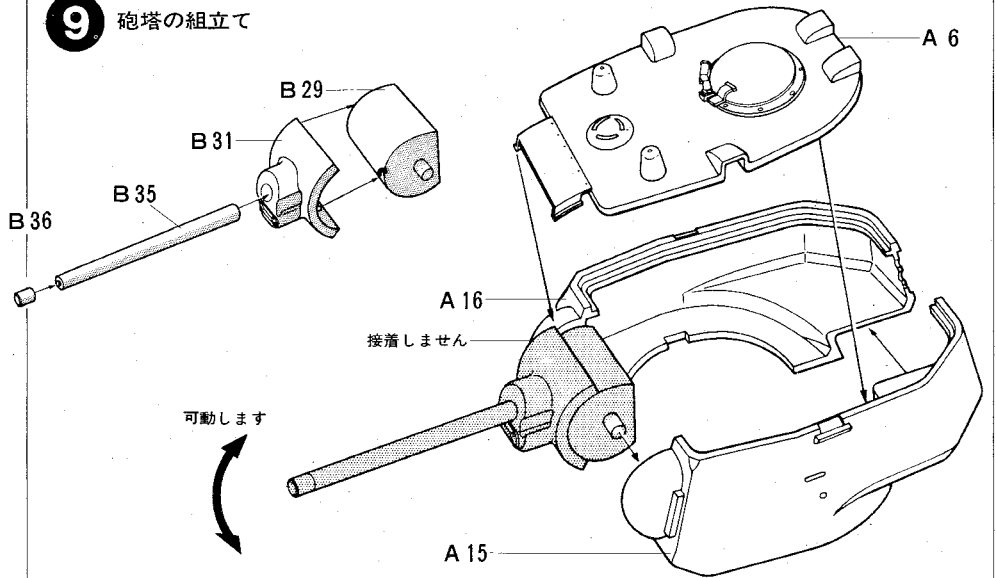




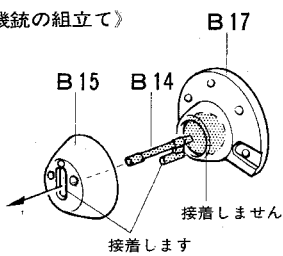
8 コマンダーズハッチの組立てととりつけ



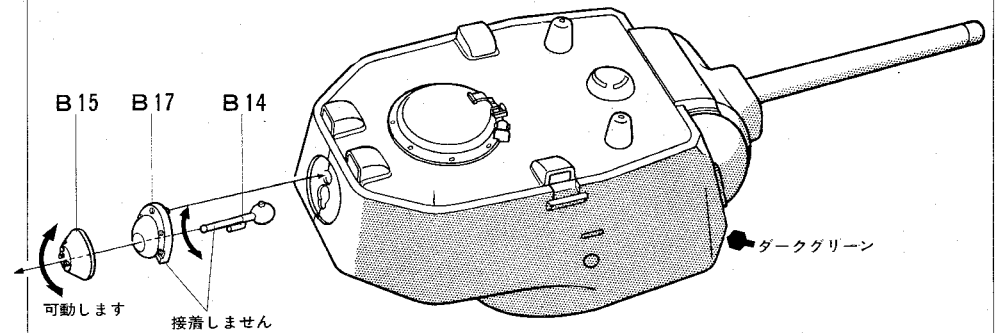
9 砲塔の組立て



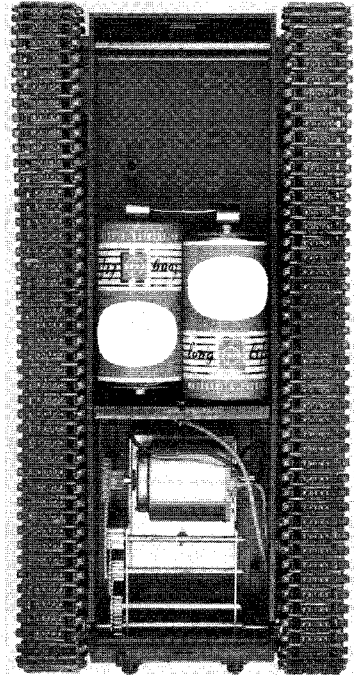
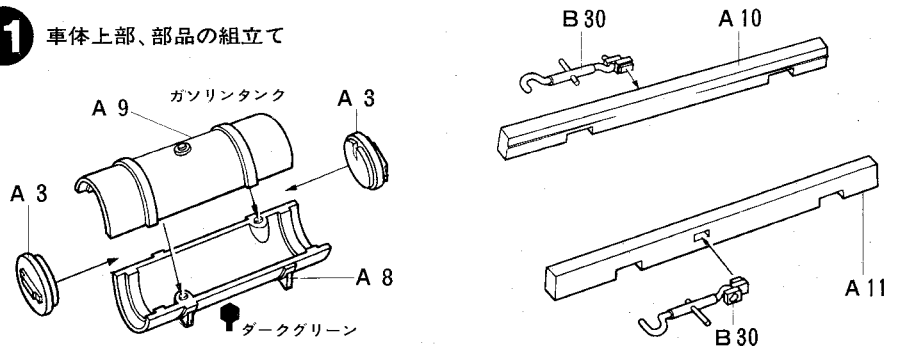
10 《機銃の組立て》



10 砲塔後部機銃の組立て

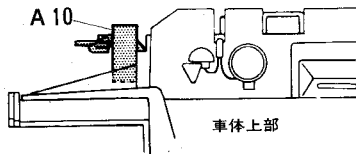


11 車体上部、部品の組立て

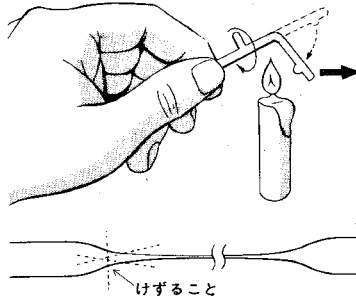


12 《車体上部のくみだて》

★A-11とA12は、下図を参考にして下さい。

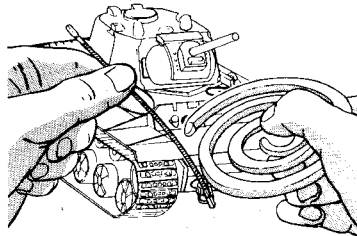


13 《アンテナの作り方》



★ランナー(枝)を利用して上図のようにまわしながらローソクであたためて曲ったらローソクからはなし、ゆっくりひっぱると細くなります。動かさずに15秒ぐらい冷したら7cmの長さに1本切ります。

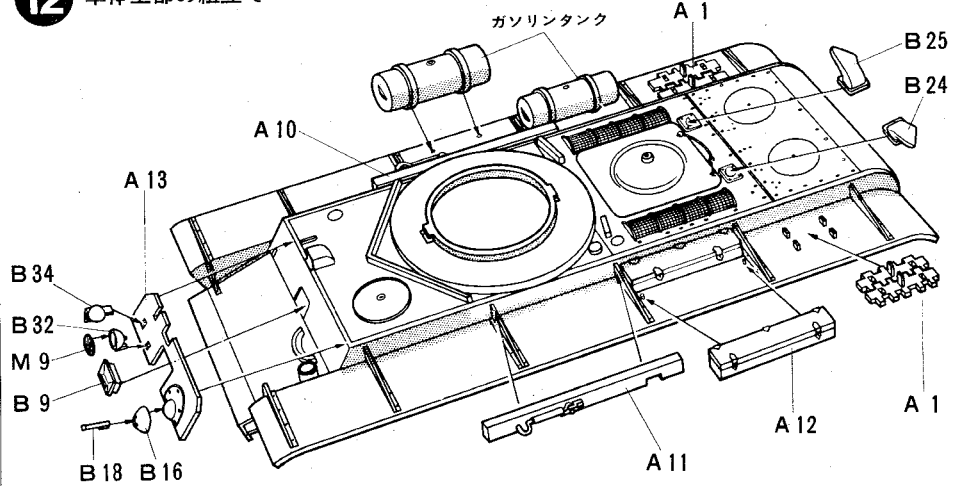
14 《ローブのとりつけ》



★ローブは蚊とりせんこうの熱であたためながらとりつけて下さい。
★火気には十分に気をつけて下さい。

★2ページの完成写真を参考にして下さい。

12 車体上部の組立て

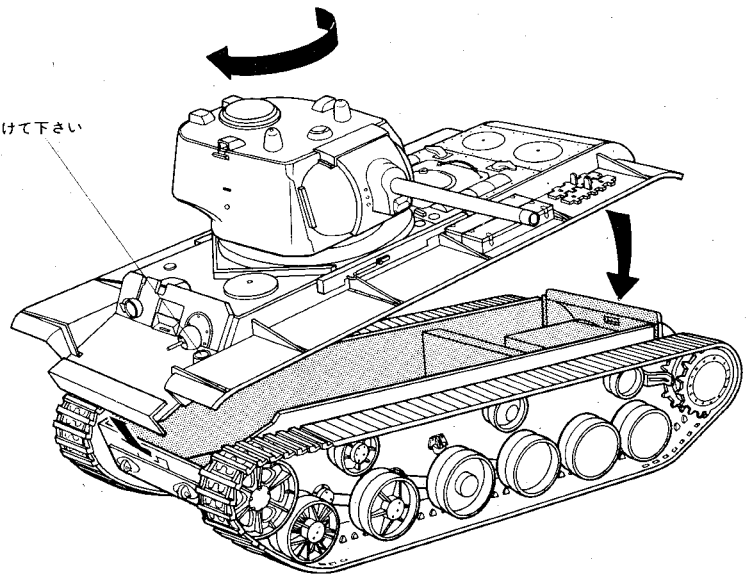


13 車体の完成

アンテナはここにとりつけて下さい



人形を外にたたせる時には足をとりつけて下さい



Russian KV-1 TYPE-C

部品を紛失したり、破損なされた方は、このカードの必要部品を丸でかこみ代金を現金書留にて、田宮模型企画部検査課迄お申し込み下さい。

A 部品(砲塔)	220円
B 部品(ホイル)	200円
車体上部	180円
車体下部	200円
キャタピラ	90円
ポリキャップ	60円
透明部品(レンズ)	60円
金具ギヤー袋詰	160円
マーク	60円

★★ 田宮模型
静岡市小鹿50-1電話865105-7



写真の人形は簡単な改造がしてあります

PAINTING

APPLYING DECALS

《塗装について》

ソビエト軍戦車の標準的な塗装は、全面吹き付け塗装によるダークグリーンの一色です。SU-100などにみられる迷彩模様はKV-Iにはみられません。冬期にはダークグリーンの塗装の上に白色の塗料や石灰などを塗ってカモフラージュしたものがみられます。この冬期迷彩ではダークグリーンの下地がところどころ見えるような塗り方がよいでしょう。

戦車の実感を出す方法に、いわゆる「よごし」があります。

- 実戦時、弾丸があたってえぐれた状態
- 砂漠、泥沼などを走ってよごれた感じ
- エキゾーストパイプ [排気管] のすすのよごれ。
- スプロケットホイールの歯が摩耗して光っているようす。
- オノ、シャベルなど工具類の、戦車の行動時を想定して行う再塗装。などを表現してみるのも面白いでしょう。

★戦車の車体の塗装にはタミヤで発売されているスプレー式タンクカラーをご使用下さい。

TANK COLOR

ダークグリーン……DARK GREEN
 レッドブラウン……RED BROWN
 オリーブドラブ……OLIVE DRAB
 ダークイエロー……DARK YELLOW
 ジャーマングレー……GERMAN GREY



★細部の塗装にはスケールモデル専用塗料のパクトラタミヤが便利です

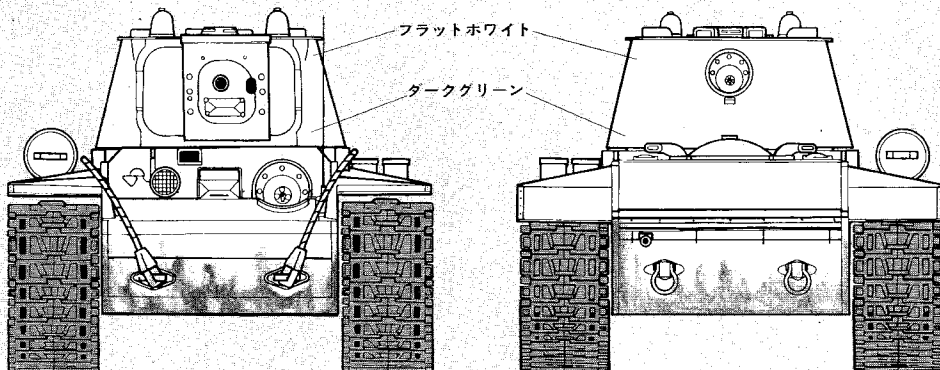
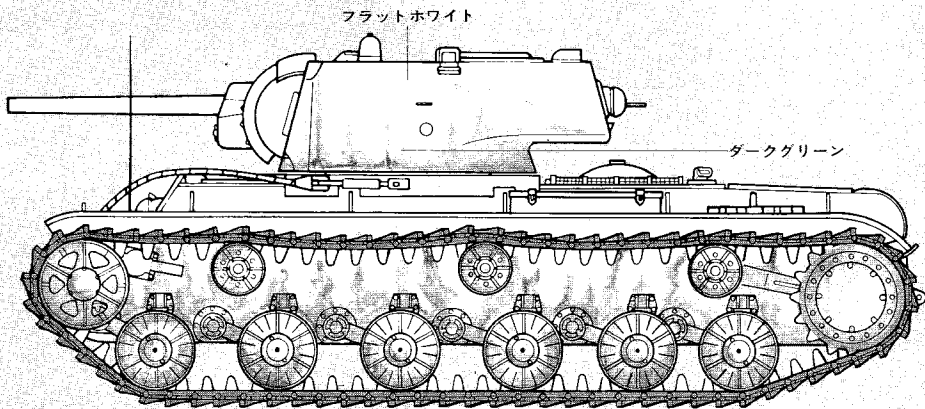
PACTRATAMIYA

グロススタンダードカラーセット……6色
 フラットスタンダードカラーセット……6色
 デティールカラーセット……6色
 コニフォームカラーセット……6色
 カモフラージュカラーセット……6色

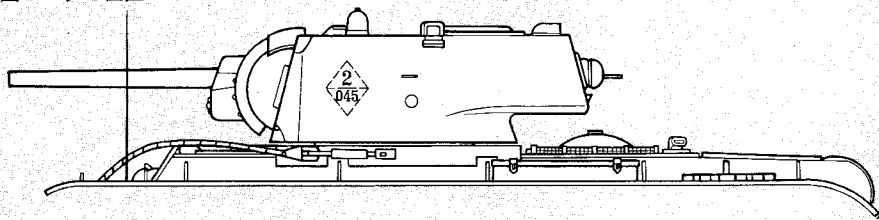
《マーキングについて》

KV-Iを始めとする数多くのソビエト戦車のマーキングは、その秀れた性能と相反するように、ドイツ軍などにみられる幾何学的な部隊マークはまったくつけられていませんでした。各部隊や小隊を表わす標識は、三角形やダイヤモンド型のわくの中に書かれた数字によって表わされているようす。しかしこの無味乾燥な数字のマークに反してか、又愛車の性能に絶体の信頼をよせてか、カモフラージュ効果をまったく無視したスローガンが、砲塔側面に大きく書かれています。“スターリンのために” “祖国よ永遠なれ”とあまり上手でない文字で描かれている言葉は、戦車兵魂をよく表わしてくれま。これらの文字はダークグリーンの車体には白色で、冬期迷彩の白い車体の上には黒色で書かれています。

冬期迷彩

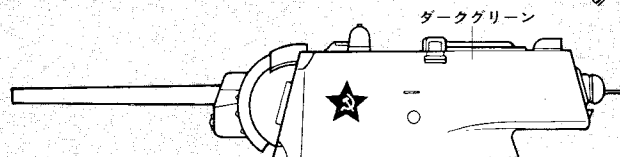


師団マークの位置



戦功記章

戦場で功績のあった部隊に送られました。

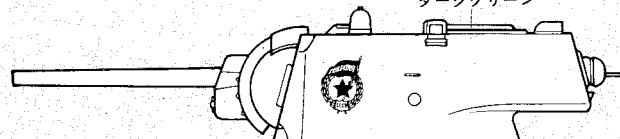


どちらもバレードなどの武典の時つけられました。

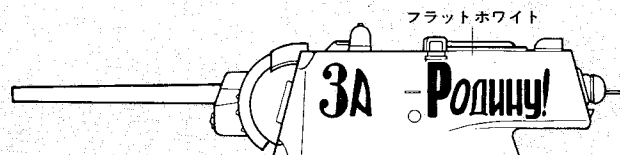
ダークグリーン

近衛記章

各部隊の中で特に優れた隊が近衛部隊に選ばれました。



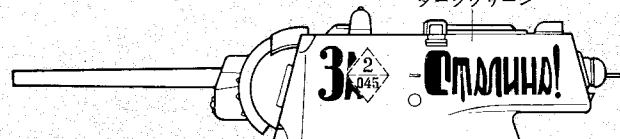
祖国のために



どちらも師団マークの上から書かれました。

ダークグリーン

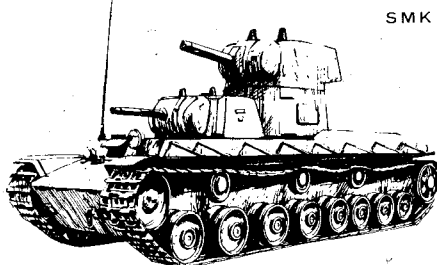
スターリンのために



KV重戦車（ロシア語名KB・カーヴェー）は、スターリンの古くからの親友であり、同志であったクリム・ウォロシロフ元師の名にあやかっけて付けられた名前を持つ、ソ連の誇る第2次大戦の重戦車である。彼は1925年にソ連で初の陸軍元師に推せられたソビエト革命の英雄であり、当時、ソ連の国防大臣とも言うべき、ソ連防衛委員会議長を務めていた。KV（KB）とはその頭文字をとったものである。

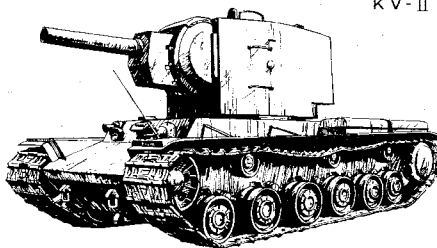
1930年代に入ると、ソ連ではそれまでの外国戦車の使用と模倣の時代から脱皮し、ソ連独自の構想による戦車の開発にのりだした。ソ連は、機械化部隊の中心となるべき戦車を大きく2種類に分けていた。第一は高速中戦車であり、歩兵の支援を当然のこととして行えるほか、独立部隊として使用される場合を考慮して、強力な武装と有効な装甲をあたえられることになった。ソ連がこの種の戦車に特に要求したのは軽快な運動性であり、この系列はBTおよびT34戦車に発展していくことになる。第二が重戦車であり、この車種は敵陣に侵入する際、中戦車を支援するほか、直接、敵陣の主要な火力を撃破する任務を与えられた。このため強力な火力と装甲を要求され、速力は多少犠牲にされた。この系列の戦車はT100、SMK（CMK）より初まり、KV、スターリン戦車へと発達し、現在の主力戦車となる。

1936年、レニングラードにあるキロフ戦車工場ではコーチン技師を長とした重戦車設計チームが作られた。この設計チームの目標は、戦車用の強力な厚板鋼板の製造から始まり、理想的な車体と砲塔の構造の研究、重量軽減のためにそれまでのリベット工法にかかわって重戦車に溶接工法を大巾に取り入れることであった。1937年春、最初の試験用戦車T-46-5型が完成した。重量28トン、主砲は45mm砲1門、装甲は37mm対戦車砲弾に耐え得るよう60mmとされた。この戦車は、わずか数台が作られたにとどまるが、後のソ連戦車の方向を暗示するような画期的な戦車であり、初めてソ連独自の設計で作られた戦車であった。コーチン技師のチームは、次に重戦車T-35の後継者とも言うべき、重戦車SMK（CMK）及びT-100の設計に入った。これらの重戦車は共に二重砲塔を持っていたが、T35



SMK

コーチン技師のチームは、近代戦車の元祖とも言えるKV重戦車の設計に取り組むことになった。1939年2月のことである。1939年9月、第2次大戦の始まりとなったポーランド戦が、ドイツ軍の華々しい勝利のうちに戦われている頃、単一砲塔を持った新型戦車の原形が完成した。総重量は43.5トン、サスペンションはT-100と同じトーションバー方式を採用し、転輪はT-100で8個だったものが6個に減らされ、キャタピラも同一の鋼製のものが使われた。車体形状もT-100で採用したものを踏襲し、操縦士は車体中央に位置するなど、ソ連重戦車の伝統とも言える機構をすべて完成したのである。装甲は前面75mm、側面60mmの重装甲であり、武装は、T-100で採用された30.5口径の76.2mm砲1938年型を、これも又、T-100の後部砲塔を改良した新砲塔に装備した。機銃は砲塔内の主砲と連装で一丁、砲塔後部及び車体前面に各タードずつ、計三丁の7.62mmデフチェレフ戦車機銃が装備された。エンジンはB-2K型、12気筒水冷ディーゼル出力550馬力が使われた。これは当時量産されはじめたT34中戦車のエンジンと同一であり、当然、最高速度はT-34の53km/hとは比較にならない35km/hで満足しなればならなかった。新型重戦車は約1ヶ月



KV-II

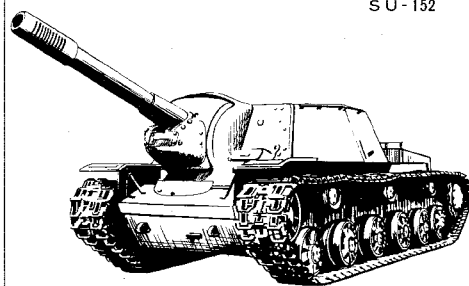
にわたる厳重な軍のテストの結果、1939年12月19日、正式に量産が決定され、名前もクリム・ウォロシロフ1と呼ばれることになった。KV-1の量産第1号車は1940年2月、レニングラードのキロフ戦車工場で作成、その後も続々と生産されることになった。152mm榴弾砲を搭載したKV-2も同じキロフ工場で作産された。

1941年春、KV-1は主砲を更に強力な41.6口径の76.2mm砲に換装され、同時に前面装甲を100mmに引き上げられた。また砲塔も鋼板溶接方式だけでなく、新たに鋼製方式も採用され、このため重量は47.5トンに増加した。ソ連では、戦車を武装や装甲の多少の変化では別型式に分けることはしなかったが、この改良型がいわゆるKV-1A及び1B.1Cと呼ばれる。KVの生産台数は1940年には245台、1941年の独ソ戦開戦までに393台となっている。そして各部隊に配属された508台のKV戦車が、独ソ戦の当初、ドイツ戦車部隊と激烈な戦いを展開したのである。1942年夏、ソ連は改良型のKV-1S（ロシア文字・C）を前線へ送る。正式にS型と呼ばれた

この重戦車はそれまでの重装甲を多少犠牲にしても機動性を重視したものであり、重量は42.5トンと軽減され、最高速度は、エンジン冷却装置の改良もあって42km/hへと向上した。砲塔も流線型の前面形状を持つ遊弾効果のすぐれたものに新設計された。

1943年夏、KVシリーズの最終型、KV85が登場した。主砲に49口径の85mm砲1943年型を搭載したKV-1Sの強力な改良型である。重量は46トンに増加したが、エンジンの馬力アップで最高速度は42km/hを維持した。外観上、砲の大小を除けばS型と大変よく似ている。ただ乗員が1名減って4名になったことと前方固定機銃が無くなったことが大きな変化である。

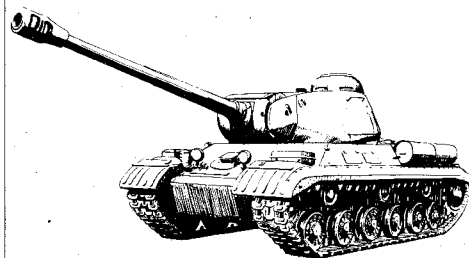
KV-1重戦車は、第一線部隊によく配備されたばかりで、ドイツ軍の侵入により、ただちに戦闘にまき込まれた。独ソ開戦当時、



SU-152

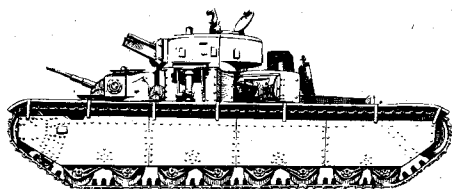
ソ連戦車部隊は主力戦車をT-34、KV-1に改編中であつた。この最悪の状況の下に、T-34、KV-1両戦車はドイツ戦車と文字通りの死闘を展開したのである。特にKV戦車の重装甲はドイツ軍将兵の驚異的であつた。III号、IV号戦車の砲弾をことごとくはねかえし、突進してくるKV戦車を、ドイツ軍将兵は恐れをこめて「怪物」と呼んだ。高性能を誇る88mm対戦車砲の弾丸さえ、KV戦車の装甲を容易に破ることはできなかったのである。KV戦車は戦いの中で常に成長し、スターリン重戦車にバトン渡して、その生涯を終えた。しかし、このKV戦車の基本的な構想は、ソ連をはじめとして各国の近代戦車の中に引き継がれているのである。

JS-2



KV-1 type C 主要データー
 全長 6.79m 全高 3.25m
 全幅 3.33m 戦備重量 47トン
 武装 41.5口径76.2mm砲M1940:1
 7.62mm機銃:3

エンジン B-2K水冷V型12気筒ディーゼル
 最高出力 550馬力/2150rpm
 最高速度 29.6km/h
 航続距離 250km
 乗員 5名



T 35

型と較べると格段の進歩を示していた。この56トンにも余る重戦車に初めてトーションバー方式のサスペンションを採用し、主砲にはT-46-5で用いた45mm砲と新たに開発された76.2mm戦車砲1938年型を搭載した。このT-100とSMKは大きさと同二重砲塔を除けば車体形状はKV-1重戦車に引き継がれていくことになる。

コーチン技師のチームがT-100の設計を完了したころ、ソ連軍首脳は、航空機の発達とスペイン内乱の教訓から、大型戦車は陸上における戦艦とはなり得ず、特に二重砲塔を持つ大型戦車は、変化の激しい近代戦には不適であることに気づきはじめた。この結果、コ